

令和三年度 岡山学芸館高等学校 選抜一期入試【二月二十九日】 問題（国語）

注意① 解答はすべて別紙の解答用紙に記入しなさい。

注意② 字数が指定されている設問では、「」や「。」も一ます使いなさい。

1

次の文章は、高校の弓術部に所属するサエキ（弓子）が、部活動を終えた帰りに、弓術部の先輩である矢部の先輩と話をしている場面である。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

受験番号
算用数字

「ねえ、サエキ、^㉑今更^㉒だけど、なんで弓、やろうなんて思ったの？」
^㉓ほんと、なんでだろう。自分でもわからない。なぜ弓を選んだのかと、会う人ごとに聞かれたものだ。
 袴^{はかま}を履いてみたくつて。
 かつこいいから。
 精神修行のため。
 名前が弓子だから。

そんなことを、その^㉔都度、適当に人に言ってきた。入部して三ヶ月。なんだかここにも、自分の居場所はなくて、続けられるかもわからなくて。なのに、放課後は、ほとんど毎日、弓道場で弓を引く。どこへ行ったって、この違和感はずいって回る。物心ついた頃から、ずっとそうだった。自分がここにおいて、生きていくというそのことが、多分、違和感を生み出す要因なんだ。

問いかけには、問いかけで答える。
^㉕先輩は、どうして弓だったんですか？
 つい過去形になったのは、矢部先輩が、先日の部内引退試合で、正式に弓術部を引退したからだ。

あの日以来、他の、高三の先輩たちは、弓からさっぱり手を引いた。そして受験勉強の態勢に入った。なのに矢部先輩だけは、まるで引退なんかなかったかのように、相変わらず弓道場へやってくる。たまに校内ですれ違う高三の先輩たちが、顔つきまで変わってよそよそしく見えるのは違って、矢部先輩にはわかりやすい変化が見られない。

わたしたちの練習を見たり——それは指導するという意味を含まない、^㉖ただ眺めるという意味の「見る」だったが——自分でも弓を引いたり。先輩はもしかしたら受験しないのだろうか。なぜ来るのかなと、みんな、口には出さないけれど、きつと心の中で思っている。今までは、失礼ながら存在感なくて、ほとんどいるってことも意識しないくらいだった先輩のことを、わたしたちは初めて、意識している。

「聞いたってなんだけど、部活動だって、結婚だって、結局、何かを選んだ理由なんか、きつと、わからないよ」
 「ケツコン、ですか。したことないから、わからないです。先輩、結婚するんですか」

「そっちに振れる？ 弓の話よ。あたしが自分で不思議でならないのは、こんだけ下手なのに、めげない自分のこと。高校の三年間、結局、一度も正選手になれなかった。なのに弓をやめなかった。意地というわけでもないのよ。でも普通は、上手だから、それがモチベーションになって、もつと、どんどん、うまくなるものでしょう。あたしはそうじゃない。もはや好きか嫌いかっていうのも、わからないの。ただ弓に引っ張られているのは事実。なのには外れればばかり。ああ、何やってるんだらう」

情けないというように先輩が言う。矢が中^{あた}るか、外れるか。弓道って、たったそれだけのこと。考えるとなんだか馬鹿みたい。
 的から外れればまるで、自分の心が受け入れてもらえず弾かれてしまったようにゼツボウする。そのときそこに、ありありと残っている我が身。^㉗なにをしても、この身だけは消えることなく残り続ける。どつしりと。それだけは疑いようもない。

自分で飛ばしながら飛んでいく矢は、もはや自分を置き去りにして、命を得たように離れていく。的をめがけ、矢道^{やみち}を一心に、一瞬をすこしだけ引き伸ばしながら。
 引退してもなお、自分に迷い、そうして心を弓に残している矢部先輩。その姿が矢を離れたのちの、一人で立つ「残身^{ざんしん}」そのものと思えた。

ああ、我が身、我が残身。
 弓道には、射法を八段階に分けて、それぞれのあるべき射形^{しやけい}を定めた、「射法八節」と呼ばれるものがある。最後、矢を離れた直後の姿勢が、「^㉘残身（心）」と呼ばれる構えである。つまりそこにおいて、気力は最も充溢^{しゅういつ}する。矢を離れたからといって、すぐに構えを解くべきではない。気合いを抜かず、その構えのままに、最後、

「弓倒し」のかたちに至り、そこでようやく、一連の動作を終える。
 出典 小池昌代『地面の下を深く流れる川』

（注）矢道：弓道で、矢を放つ場所からの間にある、矢の飛ぶ場所。

① ——の部分㉑・㉔の漢字の読みを書きなさい。

② 「^㉓ほんと、なんでだろう。自分でもわからない」とあるが、理由もよくわからないまま選んだ弓術部に所属している今の自分に、サエキは何を感じていますか。五十字以内で書きなさい。

③ 「^㉕先輩は、どうして弓だったんですか？」とあるが、サエキのこの問いかけを聞き、矢部先輩が考えたこととして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。
 ア 弓を選んだ理由は今でもわからないが、自分で選んだ競技である以上、一度も正選手になれなかった無念さを抱えたままでは、受験勉強に集中することなんてできない。

イ いつまでたっても上達しないのは本当に情けなく、意地になつていたわけでもないのに、めげることなく三年間続けてこれたのだから、自分が弓を選んだのは運命だったのだろう。
 ウ 今となつては自分が弓を好きか嫌いかわからないが、それでも弓から離れられなかったのだから、自分が弓を選んだ理由なんて、自分自身でもわからないものだ。

エ 同級生たちは勿論、弓術部の先輩と比べても、自分の技量が劣っているのは明らかで、弓に対するモチベーションもないのに、弓を選び、やめずに続けてきたのだから不思議だ。
 ④ 「^㉖ただ眺めるという意味」とあるが、このときの矢部先輩の様子を表すことばとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

- ア 注視する イ 凝視する
 ウ 諦観する エ 傍観する

⑤ 「^㉗なにをしても、この身だけは消えることなく残り続ける。どつしりと」とあるが、この部分の表現について説明した次の文のXに入れる表現技法として最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。また、Yに入れるのに適当なことばを、文章中から四字で抜き出して書きなさい。

この部分には X が用いられており、矢が的から外れると、矢のみならず Y が拒絶されているようにすら思われるが、それでも自分の存在は消えることなく、この世に存在しているのだ、というサエキの思いを強調している。

- ア 擬人法 イ 倒置法 ウ 直喩法 エ 体言止め

⑥ 「^㉘残身（心）」について、ここでサエキが感じていることとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア 本当は弓術部を引退せずに弓を続けたいと思っているが、弓道場へ行って先輩の練習を見ることで、弓への未練を断ち切るうとして、矢部先輩の悲哀を表しているようだ。

イ 弓に対する思いや、自分に対する迷いを抱えたまま弓術部を引退してしまったために、引退後も弓道場に通わずにはいられないという、今の矢部先輩の状況を表しているようだ。

ウ 弓を通して自分を高めたいという気力が体に満ちている状態で弓術部を引退したことを後悔し、今なお弓道場に通わずにいられないという、矢部先輩の苦悩を表しているようだ。

エ 弓術部で過ごした充実した日々を忘れることができず、何とか弓と関わりを持ちたいと思つて、弓術部を引退した後も弓道場に通う、矢部先輩の必死さを表しているようだ。

令和三年度 岡山学芸館高等学校 選抜一期入試【二月二十九日】 問題（国語）

2

次の文章は、言語学者の鈴木孝夫が書いた文章である。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

日本人は誰でも蝶と聞けば、春の菜の花畑にヒラヒラと舞うモンシロチョウや、夏の庭に咲く赤い鬼百合の花を訪れるクロアゲハなどを思うでしょう。道端を飛ぶ黄色の鮮やかなキチョウが目には浮かぶ人もいるかもしれませんが。そして蝶を野菜の害虫として嫌う農家の人には申し訳ないのですが、一般の日本人は蝶に対してはどっちかと言うと好感を持っていいと言えようです。

ところがこれに反して蛾となると、大半の人、ことに都会人はどういう訳かかなりの嫌悪感をもっています。蛾が夜に店の中へ飛び込んできたり、電燈の周りを飛び回ったりすると大騒ぎをする人はよく見かけます。飛び散る鱗粉が毒だとされているようです。こうして見ると、日本では、よく見れば似た格好をしている虫のうち、昼間明るいうちに外をヒラヒラ飛んで花の蜜などを吸う、綺麗な羽を持っているのが蝶で、夜暗くなるとバタバタ飛んでくる、あまり色^㉑の美しくない虫が蛾だとはつきり区別されているようです。

このように蝶と蛾を別の種類の虫だと区別するのはお隣の朝鮮語も同じで、ナビとナバンと違ったことばで呼びます。そしてこの点では日本で一番広く学ばれている英語もまったく同様で、蝶が butterfly、蛾は moth だということは中学生でも知っている人が多いと思います。ですから殆どの日本人は母語の日本語に加えて自分たちに馴染みの深い外国語である英語までが、たまたま蝶と蛾に対しては別々のことばをもっていることから、世界にはこの二種の虫を区別しないで同じものとして、ただ一つの言葉でまとめて呼ぶ言語がいくつもあることに気が付いていないようです。たとえば^㉒フランス語、ドイツ語、そしてロシア語などはこの区別のない言語なのです。

いうまでもなく私たちの周りにはこれまでこれらの外国語を深く学んだ人は沢山います。それは明治に始まる日本の大学を中心としたヨーロッパ語の勉強が、当時の列強国の軍事経済力を反映した英独仏の三言語に絞られたからです。そしてロシア語の学習は国防の見地から陸軍が力を入れましたが、一般社会では一部の文学者が目をつけ、後になって共産主義者たちや社会主義に興味を持つ人々によっても学ばれるようになりました。こんなわけでその気になれば日本語などと違ってこれらの言語では、蝶と蛾は一まとめにされて同じ名でよばれていることに誰か気付く機会があったはずだと思ふのですが、^㉓実際はそうなりませんでした。その大きな原因のひとつは、これまでの外国語学習の主目的が、遅れた日本を列強なみの強国にし、自力で国を守ることに出来るような経済力と軍事を日本が^㉔イッコクも早く手に入れることになったからで、^㉕異なった人種や民族のもつ細かな、今でいう文化人類学的な相違などには誰もあまり関心がなかったからです。要するに外国語は主として実学実用のために学ばれたのです。そして一度このような方向で確立された語学教育の^㉖デントウは、異文化理解に基づく国際理解の必要が叫ばれるようになった現在でも根強く残っています。

しかし現在の日本は明治大正時代のように経済や科学技術の面で欧米に全てを習う必要がなくなり、国民生活の点でもかつての先進諸国に全く引けをとらないレベルに達しています。そして諸外国との関係も以前は書物や製品を通す間接的な接触が一般であったものが、いまや国民が直接外国人と交わり仕事をするといった人間的な交流へと大きく変わってきました。この変化に対応するために外国語教育の中でも、実用性とは一見関係なく見える異文化理解をこれまで以上に重要視する必要があるのです。自分たちの理解しにくい変った外国の風俗習慣や言語上の相違を、どちらが優れているか劣っているかといった価値観抜きに、人類のあるがままの多様性の表れとして受け止めるべき時代になったからです。

出典 鈴木孝夫『日本語教のすすめ』

- ① ———の部分㉑・㉖を漢字に直して楷書で書きなさい。
- ② 「㉑」とあるが、次の各文の——線部が同じ意味・用法であるものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。
- ア 日本の古い生活習慣を学ぶ。
 イ 晴れたので散歩に出かける。
 ウ 猫の鳴く声が聞こえてくる。
 エ 弟が図書室に入るのを見た。

- ③ 「㉒」フランス語、ドイツ語、そしてロシア語」とあるが、これらの言語について筆者が述べている内容として最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。
- ア いずれの言語も、明治時代の日本で一番広く学ばれていた英語とは対照的に、蝶と蛾を区別せずに同じものとする言語であり、日本では、遅れた日本を強国にするために、この三つの言語に絞って学ばれた。

- イ 明治時代以降の日本では、軍事経済力を高め、国防や文学について学ぶために、フランス語、ドイツ語、ロシア語の教育が行われたが、いずれの言語も蝶と蛾を区別しないことに気付いた日本人はいなかった。
- ウ フランス語とドイツ語は英語と同様に蝶と蛾を区別することばをもち、ロシア語は蝶と蛾を一つのことばでまとめて呼ぶ言語であったが、日本では、いずれの言語も日本の軍事経済力を高めるために学ばれた。

- エ いずれの言語も蝶と蛾を一まとめにして同じ名で呼び、日本では、フランス語とドイツ語は当時の列強国の言語として明治に始まる大学を中心に学ばれ、ロシア語は主に共産主義者や社会主義への関心の高い人々が学んだ。

- ④ 「㉓」実際はそうなりませんでした」とあるが、この理由を説明した次の文の□□に入れるのに適当なことばを、文章中から八字で抜き出して書きなさい。
- 明治に始まる日本の外国語学習は、主に□□行われたから。

- ⑤ 「㉕」異なった……関心がなかった」とあるが、このことについて筆者が述べている内容を説明した次の文の□□、□□、□□に入れるのに適当なことばを、□□は文章中から六字で抜き出して書き、□□は四十字以内で書きなさい。
- 以前とは異なり、□□によって諸外国との関係を結ぶことが一般化している現代では、異文化に見られる自国文化との相違を、□□という姿勢が求められており、文化人類学的な観点に関心を持つ必要がある。

- ⑥ この文章の構成と内容の特徴について説明したものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。
- ア 冒頭に蝶と蛾を区別して呼ぶ日本人の、蝶と蛾に対する印象の違いを示すことにより、母語の構造がその国の文化や人々の感性に影響を与えるという考えを示唆している。

- イ 日本人に馴染みの深い英語と日本語の違いを示すことにより、日本が経済や科学技術の面では欧米を手本としながらも、言語の面では独自性を保ってきたことを強調している。
- ウ 明治大正時代における日本の外国語教育の問題点を指摘した上で、実用的な言語であるという日本語の利点を国際社会の場で有効活用すべきだという主張を展開している。

- エ 筆者自身が抱いている蝶への好感と蛾への嫌悪感を述べた上で、自分とは感覚の異なる他者と分かり合う力をつけるために、学校での教育が重要であると結論づけている。

令和三年度 岡山学芸館高等学校 選抜一期入試【二月二十九日】 問題（国語）

3

次の文章は、松尾芭蕉の俳句を引用しつつ書かれた解説文である。これを読んで、①～③に答えなさい。

貞享三年（一六八六年）春、芭蕉は古池の句を詠んだ。

古池や 蛙 飛びこむ水のおと 芭蕉

この句は芭蕉の句の中でもっとも有名な句である。そればかりか、古今の俳句の中でもっとも知られた句である。古池の句なら誰でも知っている。今では芭蕉の名とともに海外にまで知られている。古池の句は俳句の中の俳句なのだ。

ところが、それほど有名な句であるにもかかわらず、この句は謎に包まれている。古池に蛙が飛びこんで水の音がした。誰でもそういう意味だと思っているが、もしそうだとすればおかしなことがあるのだ。

この句は蕉風開眼の句といわれる。蕉風開眼とは芭蕉が自分の句風にめざめたということ。では、この句のどこが蕉風開眼なのか古池に蛙が飛びこんで水の音がした？ 芭蕉はこの句を詠んで、いったい何に目覚めたというのか。

古池の句にいくら問いかけても何も答えてはくれない。蛙が水に飛びこんだ音が聞こえるだけ。古池の句は蕉風開眼の句であるといわれて、誰もが **X** ような気持ちになっているというのがほんとうのところだろう。

ここに支考という人がいる。美濃の人で元禄三年春、近江で芭蕉に入門した。そのとき、三十代半ば。前年秋に『おくのほそ道』の旅を大垣で終えた芭蕉が上方に滞在していたときのことである。

蕉門の中では古い弟子ではない。この支考が芭蕉の晩年、そして死後、芭蕉にとつて重要な役割を果たすことになる。それは蕉風を広めるという役割。宗教でいえば親鸞の浄土真宗を広めた蓮如、イエスの使徒のパウロに当たる人である。

支考は芭蕉の死後、俳句の実作、俳論、精力的な行脚によって蕉風を全国に広めた。もし、この人が芭蕉の弟子にならなかつたら俳句の歴史はずいぶん違うものになっていただろう。蓮如のいない浄土真宗、パウロのいないキリスト教を想像してもらえばいい。

支考は蕉門に入ると、元禄七年冬、芭蕉が大坂で亡くなるまでの四年あまり、そのかたわらにあった。入門の翌年、元禄四年春、芭蕉とともに江戸にくんだり、元禄七年夏、芭蕉とともに上方へのぼった。上方でも芭蕉に従い、その臨終を看取った弟子の一人となる。

芭蕉が江戸にいた元禄五年春から夏にかけて支考は一人、江戸から松島、象潟へ旅をした。三年前、芭蕉が旅したあとを慕ってのことである。支考が芭蕉にいかにか心酔し、熱心に吸収しようとしていたかがよくわかる。入門以来、支考が **Y** のはこのときだけだった。

元禄五年夏、松島、象潟への旅を終えて江戸の芭蕉のもとに帰った支考はただちに『葛の松原』を書いた。旅の形見ともいべき随想風の俳論書である。この本はその年秋、京都の版元から出版される。

『葛の松原』は蕉門初の俳論書であるとともに、芭蕉在世中に書かれたただ一つの蕉門の俳論書である。それよりずっと大事なことは、この本が芭蕉の膝下で書かれたということ。去来によれば、『葛の松原』という題は芭蕉がつけた『去来抄』。つまり、芭蕉が内容を保証したお墨付きの本なのだ。

その中に古池の句をめぐる一節がある。

弥生も名残をしき比にやありけむ。蛙の水に落ちる音しば／＼ならねば、言外の風情この筋にうかびて蛙飛びこむ水の音といへる七五は得給へりけり。晋子が傍に侍りて、山吹といふ五文字をかふむらしめむかと、をよづけ侍るに、唯、古池とはさだまりぬ。

弥生三月、今の四月も末のこと、蛙が水に落ちる音がときおり聞こえてくるので、芭蕉は興をもよおして「蛙飛びこむ水の音」という中七、下五を得た。そばにいた其角（晋子）が「山吹」という五文字を上にかぶせたらどうかといったが、芭蕉はただ「古池」とおいた。「蛙の水に落ちる音しば／＼ならねば」とはもつてまわったいい方だが、「しばしばでない」「頻繁でない」というのだから、「ときおり」「間遠に」というくらしの意味だろう。

受験番号
算用数字

ここには古池の句の謎を解き明かす鍵が潜んでいる。まず、「蛙の水に落ちる音しば／＼ならねば」とある。どこからか、ときおり蛙が水に飛びこむ音が聞こえてくるのだ。芭蕉は江戸深川の芭蕉庵の一室にいて蛙が水に飛びこむ音を聞いていた。いいかえると、蛙が水に飛びこむところも古池も見えていない。もし、芭蕉が蛙が水に飛びこむところ、あるいは古池を見ていてこの句を詠んだのなら、支考はそう書いたはずである。

次に、芭蕉は蛙が水に飛びこむ音を聞いてまず「蛙飛びこむ水のおと」という中七下五を詠んだ。そのあと、其角とのやりとりの末に「古池や」という上五をかぶせた。（中略）

ここで大事なことは、蛙が水に飛びこむ音が芭蕉の耳に聞こえた現実の音であるのに対して、古池は芭蕉の心の中に現れた想像上の池であるということ。とすると、古池の句は今まで誰もが信じて疑わなかった「古池に蛙が飛びこんで水の音がした」という意味ではなかった。現実の蛙が心の中古池に飛びこむわけにはゆかないからだ。古池の句は詠まれてから三百年間、誤解されてきた名句ということになるだろう。

古池の句は蛙が水に飛びこむ現実の音を聞いて古池という心の世界を開いた句なのだ。この現実のただ中に心の世界を打ち開いたこと、これこそが蕉風開眼と呼ばれるものだった。

出典 長谷川權『奥の細道』をよむ

（注）上方：京都付近。関西地方。 蕉門：松尾芭蕉の入門。

去来：芭蕉の門人であった向井去来。

其角：芭蕉の門人であった宝井其角。

間遠：感覚が離れている様子。

① 「かふむらしめむか」の読みを、現代かなづかいを用いてひらがなで書きなさい。

② **X**、**Y** にそれぞれ入れることばの組み合わせとして最も適当なのは、**A**、**E**のうちではどれですか。一つ答えなさい。

- A X 謎をつきつけられた Y 芭蕉に異を唱えた
- イ X 謎をつきつけられた Y 芭蕉のもとを離れた
- ウ X 何となくわかった Y 芭蕉に異を唱えた
- エ X 何となくわかった Y 芭蕉のもとを離れた

③ 解説文を授業で学習した中学生の健一さんは、学習したことを次のようなレポートにまとめた。 **I**、**IV** に入れるのに適当なことばを、**I** は解説文中のことばを使って十五字以内で書き、**II** は五字、**III** は八字、**IV** は四字で、それぞれ解説文中から抜き出して書きなさい。

【健一さんのレポート】

「解説文中に引用された俳句について」

俳句の中の俳句と呼べる句であり、蕉風開眼の句ともいわれている。「古池に蛙が飛びこんで水の音がした」という解釈が一般的であるが、芭蕉の弟子の一人である支考が書いた『葛の松原』の中にある、古池をめぐる一節からは、古池の句が **I** ものであることが読み取れ、そこに、古池の句が蕉風開眼の句といわれる理由を見ることができるとある。

「支考と『葛の松原』について」

支考は、芭蕉の晩年に弟子となり、芭蕉の死後に蕉風を広めるという役割を通じて、現在に至る **II** を作った人物だといえる。『葛の松原』は、**III** を追った支考が、一人旅を終えて芭蕉のもとへ戻ったあとに書いたものであり、芭蕉の **IV** の本である点が重要である。

4

四人の中学生が、コミュニケーション能力に関する問題をテーマとするグループ学習で、【資料Ⅰ】～【資料Ⅲ】をもとに話し合いをした。次の【四人の中学生の話し合い】を読んで、①～④に答えなさい。

【四人の中学生の話し合い】

大樹

昨日の新聞記事によると、企業が新卒者を採用する際に特に重視するものとして、十年以上、コミュニケーション能力が第一位になっているそうだよ。本校でも、コミュニケーション能力に関する調査が毎年行われているよね。

知美

【資料Ⅰ】を見ると、X。そこから考えると、自分にコミュニケーション能力があるかどうかを意識する人が年々増えてきていると言えそうだね。以前読んだ本にも、価値観が多様化した現代では、友人同士でもお互いの価値観を調整し合うために、より高いコミュニケーション能力が求められると書かれていたよ。

陽子

【資料Ⅱ】を見ると、意見の違いに折り合いをつける力が最も重要だと回答している生徒の割合が高くなっているけれど、お互いの価値観を調整し合うということに結びつけることができそうだね。

博志

でも、自分の意見を主張する力のほうが重要ではないかな。折り合いをつけることを、主張することよりも優先してしまうと、コミュニケーションが消極的なものになってしまう気がするな。クラスでの話し合いでも、みんなが意見をぶつけることで、よりよい考えが生まれることがあるよね。

大樹

それは相手との関係にもよるのではないかな。クラスメートのようにお互いのことをよく知っている相手なら、意見が対立しても人間関係が悪化することはないかもしれないけれど、よく知らない相手のときは、意見が対立することで人間関係の構築に悪影響が出ないかと気にしてしまうよ。その気持ちはわかるよ。相手との関係性を考えて、適切な接し方ができることも、コミュニケーション能力の一つだよね。

博志

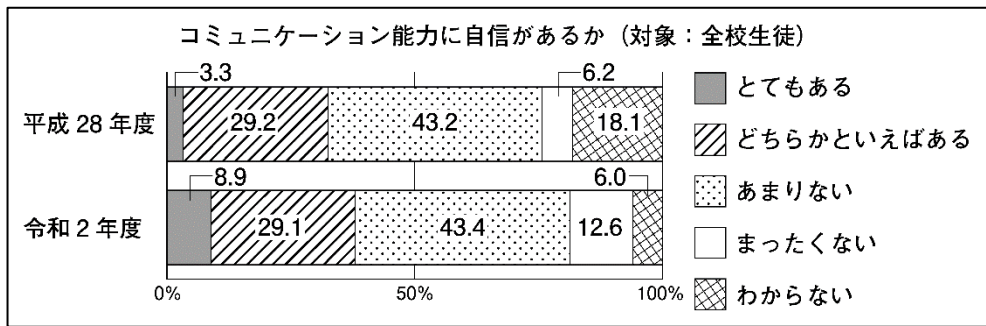
確かにそうだね。コミュニケーションは相手があつてこそ成り立つものだ意識することが大切だね。ただ、相手との関係性にかかわらず、意見を交換し合うことが、今後あるかもしれないね。そんなときは、どのような態度で相手に接すればよいのかな。

陽子

【資料Ⅲ】を見ると、

Y

【資料Ⅰ】



【資料Ⅱ】

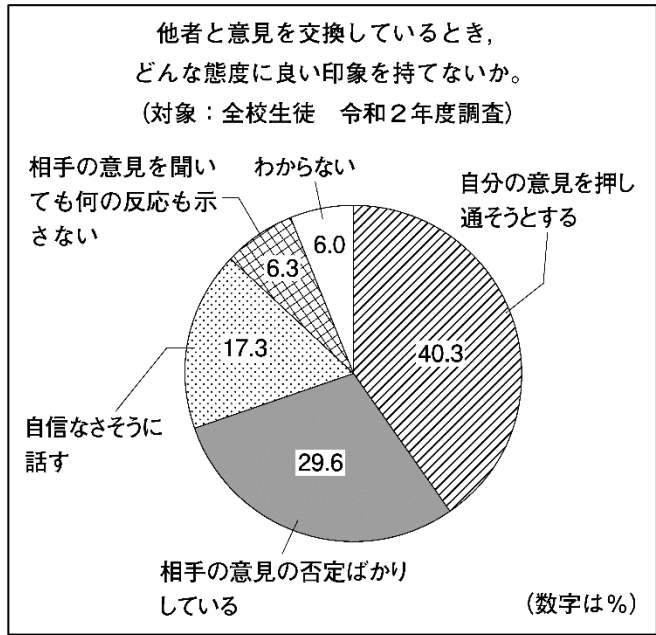
コミュニケーション能力に関して、どのような力が最も重要だと思うか（対象：全校生徒 令和2年度調査）

	意見の違いに折り合いをつける力	相手との関係を良好に保つ力	相手の気持ちなどを察する力	自分の意見を主張する力	その他
「ある」と回答した人（※1）	24.2	22.3	20.2	14.8	18.5
「ない」と回答した人（※2）	33.2	17.3	16.1	21.1	12.3
「わからない」と回答した人	40.0	25.0	10.0	20.0	5.0

（数字は%）

※1は【資料1】で「とてもある」「どちらかといえばある」と回答した人の合計。
 ※2は【資料1】で「あまりない」「まったくない」と回答した人の合計。

【資料Ⅲ】



（例）
35.0 %

条件

- 1 二文に分けて書き、一文目に、【資料Ⅲ】からわかることを書くこと。
- 2 二文目に、相手と意見を交換し合うときは、どのような態度で相手に接すればよいかを、「だから」に続けて書くこと。

※資料の数値は使わなくてもよいが、数値を使う場合は左の例を参考にして表記すること。

④ 陽子さんの発言のYに入れるのに適切な内容を、条件に従って六十字以上八十字以内で書きなさい。

- ① 「消極的」とあるが、「消極的」の対義語を漢字三字で書きなさい。
- ② 知美さんの意見が論理的なものとなるために、Xに入れるのに最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。
- ③ 話し合いにおける四人の発言の特徴について説明したものとして適当なのは、ア～オのうちではどれですか。当てはまるものをすべて答えなさい。
- ④ 知美は資料から読み取った情報に関して、自分が本で得た知識とは異なった傾向が見られると指摘している。
- ⑤ 陽子は資料から読み取った内容と知美が述べた考えとの共通点を示すことで、知美の考えを肯定している。
- ⑥ 大樹は自らの体験に基づいて、博志の発言の中ではっきりと理解できなかった部分について質問をしている。
- ⑦ 知美は大樹の意見に対する共感を示しながらも、話し合いの流れを元に戻すために博志の発言を反復している。
- ⑧ 博志は自分の意見に対して出された他者の意見を受け入れて、話し合いの流れに沿った柔軟な発言している。